ノンバーバル(非言語コミュニケーション)

★コミュニケーションにおいて言葉による意思伝達をバーバル、非言語をノンバーバルといいます。

1 ノンバーバル(非言語)コミュニケーション

一般的にコミュニケーションは、様々な符号を媒介とした情報の相互伝達の過程を意味します。そして、その符号は言語（バーバール）と非言語(ノンバーバル）に大別されます。
従来、コミュニケーションの過程は、言語によるものと考えられてきましたが、コミュニケーションに関する心理学、関連諸科学の分野で、ノンバーバールの研究が注目されています。

［心理学から見る人と人との
コミュニケーション］

●人が他者から受ける情報は
言葉による意思伝達は３割ぐらい、
残りの７割は非言語コミュニケーション
（心理学者アルバートの実験）

メラービアン(アメリカ)の実験結果	
→顔の表情（感情、態度など）	５５％
→声の質（高低）大きさ、テンポ	３８％
→話す内容	７％

上記の実験で、言葉が７％しか伝わらないということではなく、「怒っている」と言葉で話したとき、その人が笑顔の場合、笑顔や声の調子の影響力が大きくなるということです。
↓
言葉は意識的にコントロールすることができますが、声の調子や表情は、本人の態度や気持ちが無意識ににじみでやすくなります。

●ノンバーバルにはどんなものがありますか
「視線・アイコンタクト」、「表情」、
「ジェスチャー」、「声の量・質」、
「席る位置関係」、「動作」、「言葉づかい」
「身だしなみ」、「イントネーション」
「体つき(体格、頭髪、スタイル、臭いなど)」
準言語（発生の特徴、泣き、笑い、間投詞など)」

2 教師自身のノンバーバル

望ましくないパターン

① 散策型
机の間を歩きながら話す型。話す位置が常に変わることにより聞き取りにくい。

② 内職型
採点、調査書、テストの丸つけ、報告書などを書きながら話す型。児童生徒の学習活動に目を配るどころではありません。

③ 指導書依存型
教卓に置いた指導書ばかりを見ながら話す型。事前の教材研究、授業プランが必要なことはいうまでもありません。

④ 掃除型
教卓の机などを片付けながら話す型。教師は下を向いて話す姿勢になってしまう。児童生徒も気になります。

⑤ 手あそび型
常に手に何かをもって話す型

⑥ よそ見型
列の途中に立って後ろを見たり、窓の外を見ながら話す型。聴き取りにくかったり、その視線の対象が気になりやすい。

⑦ 黒板対話型
黒板に字を書きながら話す型。板書を見てノートを取ることと、聞くことの二重の負担を児童生徒にかけてしまう。

3 児童生徒のノンバーバル

① ノンバーバルを手がかりにする。
正しいとは限らない例
：テスト中にキョロキョロしている。学力の高い子には「もうおわったのかな」と考え、学力の低い子には「もうあきてしまったのだ」と考える。
↓↓
個々の児童生徒の正しい情報、その場の状況、背景等を勘案してノンバーバルのサインを読み取ることが必要。

② 問題行動となるノンバーバルを読み取るそのようにしかできない精神状態を理解しようとする態度が必要
↓↓
児童生徒の身になって考える

言葉でのコミュニケーションがすべてではありません。
・子どもたちの非言語的な部分をしっかりと受け止めていますか？
・子どもたちは、先生に非言語的な部分を受け止められていると思っていますか？

▼ △ ▼ △

【参考文献】 菅野純編著『子どもをとりまく問題と教育⑱ 問題行動へのアプローチ』，開隆堂出版，2003
國分康孝・國分久子監修『教師のコミュニケーション辞典』，図書文化，2007